

春告草

第168号 令和2年1月22日 進路指導部発行

「ラストセンター」実施される 新テストを暗示する出題も

令和最初、そしてセンター試験としては最後の実施となった31回目の大学入試センター試験が1月18日、19日の2日間にわたって行われた。出願者数は全国で57.8万人、志願者全体に対する現役生の割合は80.6%である。昨年に比べて現役生の数が減り、既卒生の数が増えたが、現役生主導の大学入試が続いている。

本校からも149名が一橋大学など5会場に分かれて受験した。

センター受験を終えた6年生は20日に登校して自己採点を行った。センターの得点と各大学で行われる個別試験との総合成績で合否が決まる現行の入試システムにおいて、自己採点の結果は国公立大学出願の際、大変貴重な出願資料となる。すなわち、自己採点結果の集約データから得られた各大学の志望者全体の得点分布における各自の位置を確かめて出願を決める。センター試験の得点が期待通りであれば、志望大学へそのまま出願すれば良いし、思ったほど得点できていなければ、ランクを下げて合格が見込める大学へ出願を変更することもある。自己採点結果が各自に届くのは明後日金曜日。国公立大への出願は、前期・中期・後期の各日程とも、今月27日から来月5日までである。

また、5年生は19日に同一問題でセンター試験を模擬受験してきた。これからあと1年でどれだけ目標大学レベルまで学力UPをしなければいけないかが、分かったことだろう。共通テスト最初の年で、これまでのセンター試験と出題形式が変わる部分もあるが、出題内容そのものが変わるわけではない。英語の資格・検定試験と記述式問題の見送りで、大学入試改革が頓挫した感が強いが、今年のセンター試験の出題を見ても分かるように、複数の資料を読み解く問題や日常生活の場面を題材とする出題が、これまでよりも多くなるのは必至である。思考力や判断力をより重視するという新テストの目的は何ら変更がない。基礎をしっかりと固めておくことが、今の時期には求められる。来年の共通テスト試験の実施日は1月16日、17日。まだ先であるが、もう1年は切った。しっかりと準備を進めていこう。

4年生の中にも、センター試験を模擬受験してきた人もいたことだろう。現段階では手が出せない問題が多かったかもしれないが、手ごたえを感じた部分もあったことだろうと思う。初年度からの記述問題導入は見送られたが、共通テストは平均点50点を基準に問題が作成される。センター試験は60点設定であるから、新テストは難化が必至だろう。上位層と中位・下位層の乖離が十分に予想される。これまでよりもより一層確かな学力が求められていることは言うまでもない。

今年のセンター試験について、概況を速報する。出題内容やレベルなどの詳細は次号以降、順次掲載していく予定である。

(情報はベネッセ・駿台による試験概況速報を引用した。)



初日は降雪となったが、2日目は快晴だった。今年は一橋大では、主に私大文系の男子生徒が受験した。試験会場は受験タイプ別に分かれ、本校生徒は一橋大の他、東京経済大、東京学芸大、津田塾大、明治薬科大で受験した。
写真は一橋大東キャンパス(1/19撮影)



両日とも「三鷹中等」の名前の入った紙袋を持って激励に出かけてきた。一期生時代より使っているの、疲れた感が強くなってきた。

令和2年度センター試験概況速報

国語 — 漢文は詩単独の出題で、イラストを選ぶ設問が出題された。難易は昨年並 —

全体に本文の分量・設問数・解答数が減少。評論では、本文の趣旨に関する対話形式の設問が、漢文では五言詩に描かれた情景についてイラストを選ぶ設問が出題。昨年同様、各大問とも文章全体の趣旨や主題を把握する力が求められた。難易は昨年並。

日本史B — 図版など多様な史資料を活用し考察する力が求められた。難易は昨年並 —

大問数、解答数に変更はなかった。文章史料に加え、昨年みられなかった図版や写真などの多様な資料が用いられ、史資料の読解力が重視された。文化史の出題は増加し、現代史は1問に減少した。難易は昨年並。

世界史B — 欧米史が減少、周辺地域史と文化史が増加。古代史・戦後史が増加。難易は昨年並 —

大問構成や解答数に変更なし。地域網羅性は継続された。地図問題は1問減少して1問となった。昨年と同様、グラフの読み取りを必要とする問題も出題された。基本的な内容が中心で、難易は昨年並。

地理B — 多様な資料を用いて図表読解力と地理的考察力が問われた。難易は昨年並 —

多様な図表が用いられ、限られた時間の中で正確に図表を読解する力と地理的な見方・考え方が求められた。特に第6問では、GISを用いて作成された図が素材として扱われるなど、多様な資料が提示された。一部資料の読み取りに時間を要する問題がみられたものの、原理・原則の理解を問う出題が中心で、難易は昨年並。

現代社会 — 現代の諸課題からの出題が増加。本文の趣旨を問う問題が復活した。昨年よりやや難化 —

現代の諸課題からの出題が増加し、各分野からバランスよく出題されていた。昨年出題されなかった本文の趣旨を問う問題が出題された。時事事項や思想分野において詳しい内容が問われ、多様な知識・理解が求められた。

倫理 — クワインやノージックなどの現代の新しい思想が扱われた。難易は昨年並 —

大問構成や出題分野は変更なし。形式に大きな変化はないが、AIなど今日の社会が直面している問題が取り上げられた。クワインやノージックなどの現代の新しい思想が扱われた。難易は昨年並。

政治・経済 — 基礎的かつ重要な事項が出題され、国際政治分野の出題は減少。難易は昨年よりやや易化 —

「倫理、政治・経済」との共通の設問が4大問中3大問で出題された。基礎的な理解を幅広く問う出題の中には、資料を用いた問題などもみられた。全体的に教科書に基づいた基本事項の理解を中心に問われており、昨年よりやや易化。

倫理、政治・経済 — 「AIと人間の仕事」「企業の資金調達」などが資料読解を通して扱われた。難易は昨年並 —

すべての設問が単独科目「倫理」および「政治・経済」と共通であった。倫理分野では文献資料の読解や思想の正確な知識理解が問われ、政治・経済分野ではグラフの読解や理論を具体化するなどの考察力が問われた。両分野とも基本知識を問う出題が多くを占めた。難易は昨年並。

数学Ⅰ 数学A — 「場合の数と確率」で異なる題材の確率を考える問題が出題された。昨年より難化 —

大問数、配点は昨年と同様。問題量、計算量も昨年並であるが、目新しい問題が多く出題された。「場合の数と確率」では、4つの異なる題材の確率を考える問題が出題され、「整数の性質」では、循環小数と n 進法に関する融合問題が出題された。難易は昨年より難化。

数学Ⅱ 数学B — 「指数・対数関数」と「図形と方程式」の融合問題が出題された。昨年よりやや難化 —

大問数、配点は昨年と同様。問題量、計算量も昨年並。「対数関数」では「図形と方程式」との融合問題が出題され、数学Ⅱの全分野から幅広く出題された。また、「ベクトル」では成分表示から四角形の形状を判断する問題が出題された。難易は昨年よりやや難化。

物理基礎 — 教科書で定性的に扱われている斜方投射が定量的に出題された。難易は昨年並 —

典型的な素材を中心に、物理基礎の内容から幅広く問われた。教科書で定性的に扱われている斜方投射が定量的に出題され、問題文に各方向の運動と初速度を与えて解答させている点は目新しい。電力輸送の問題は日常を意識した出題であった。難易は昨年並。

化学基礎 — 計算問題は応用力が求められたが教科書に沿った基本問題も多く、昨年より易化 —

実験操作や生活に関わる物質についての問題が昨年に引き続きみられた。物質質量やモル濃度に関する計算問題は、問題文の正確な読み取りと応用力を求める内容であった。全般的には教科書に沿った基本的な問題が多く出題され、昨年よりやや易化した。

生物基礎 — 会話文形式や、グラフの読解を求める出題がみられた。昨年よりやや難化 —

基本的な知識を用いて思考する必要がある問題が各大問で出題された。基本的な知識を問う問題が多く、論理的な思考力や与えられたグラフを読み解く力を問う出題もみられた。昨年より易化。

地学基礎 — 図が多用され、ハザードマップや降灰分布予測図が出題された。昨年よりやや易化 —

昨年は出題がなかった災害に関する問題が第4問として出題された。また、昨年に引き続き図に関連した設問が半数以上を占めた。風向・風力を表す矢羽やハザードマップは現行課程で初めての出題であった。全体的に基本的な問題が多く、昨年よりやや易化。

物理 — 円筒形の導体に誘電体をはさんだコンデンサーの設定が目新しい。昨年よりやや易化 —

選択問題は熱力学と原子で、原子ではニホニウムの生成の核反応式が取り上げられた。円筒形の導体を加工し誘電体をはさんだコンデンサーの設定が目新しく、平行板コンデンサーの等価回路として考えさせる出題があった。部分点設問が復活し、昨年よりやや易化。

化学 — 実験操作を題材にした問題が多く、読解力と思考力が求められた。難易は昨年並 —

計算問題の数は、昨年とほぼ同程度。実験を題材にした問題文を正確に読み取ったうえで、操作の理解と結果を考察する力が求められた。また、中和滴定の指示薬やニッケル水素電池の充電を題材にした目新しい問題も出題された。難易は昨年並。

生物 — 例年同様、論理的思考力が必要な考察問題が多く出題。昨年よりやや難化 —

昨年同様に幅広い分野からの出題で、全大問でグラフや表などを読み取り考察する、思考力を要する問題が出題された。変異体の表現型から変異の原因となった遺伝子を考える問題や条件の異なるデータを比較分析する問題が、複数出題された。昨年よりやや難化。

地学 — 高層天気図の時間変化など、図やグラフに関する問題が増加。昨年よりやや難化 —

単純に語句のみを問う問題が減少し、正文や図を選択する問題が増加した。マグマの移動に伴う重力変化、海洋プレートと大陸プレートとの間での地震波の屈折、高層天気図の時間変化といった目新しい題材が多く扱われた。昨年よりやや難化。

英語・筆記 — 出題形式は変更なし。第4問Aでは図をもとにした計算問題が出題された。難易はやや難化 —

例年通り、前半では発音・アクセントや語彙・文法の知識が問われ、後半では図表を含む説明文、物語や論説文など、多岐にわたる素材を読み解く力が求められた。文法・語法などの基本的な知識とともに、英文全体から素早く内容を把握する力が求められた。例年よりも取り組みづらい問題が増え、全体としてやや難化した。

英語・リスニング — 日常の場面における実践的な英語力が問われた。難易はやや難化 —

昨年に続き、音声情報と視覚情報を組み合わせて答える問題が出題された。場面に応じた聞き取りが必要とされ、実践的な英語力が問われた。情報の類推や口語的な応答表現を問う問題を中心に取り組みづらい出題がみられ、第3・4問では解答時間が短くなった。

大学入試ガイド(3)

Road to University

私立大学の入試

連載3回目は私立大学の入試を解説します。私立大学の入試では多種多様な選抜方法が実施されています。名称だけでは分かりにくい入試制度もあるので、それらの基本的な仕組みについて学習しておきましょう。

●私立大一般入試のスケジュール

国公立大学と同様、私立大も選抜方法は大きく分けて3つある。すなわち、一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜の3つ(※)。総合型選抜、学校推薦型選抜は、国公立大と合わせて別号で解説するので、ここでは一般選抜に限定して解説します。(※現5学年受験年度より、一般入試、AO入試、推薦入試がそれぞれ名称変更される)

まず、受験する前年の7月上旬までには選抜要項が発表され、試験日程や受験科目などが判明する。出願手続きなどの説明が掲載された募集要項の公表は各大学によって異なるが、9~11月がピークとなる。募集要項といっても紙媒体の要項の配付は少なくなり、各大学のホームページからダウンロードする方式になっている。

入試は共通テスト実施後の1月下旬から、まず関西地区を中心に本格化し、2月中旬には首都圏を中心に最盛期を迎

える。3月には後期入試、2期募集などが実施され、3月下旬には大半の私立大で入試は終了する。

●私立大一般選抜の出題科目

共通テスト利用入試を除く私立大一般選抜の科目を見てみよう。英語は「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、英語表現Ⅰ・Ⅱ」を課す大学が多い。国語は「国語総合」のみまたは「国語総合、現代文B、古典B」を課す大学が多いが、「国語総合(古文・漢文を除く)、現代文B」を課す大学も見られる。地理歴史は日本史・世界史・地理の各B科目が圧倒的。理科では、「基礎・発展」1科目が多く、難関大や医学科では「基礎・発展」2科目を課すところが目立つ。数学は、文系では数学Ⅰ・Aや数学Ⅰ・Ⅱ・A、理系では数学Ⅰ・Ⅱ・A・Bや数学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・A・Bなどを課す大学が目立つ。

なお、私立大一般選抜で小論文を課すところを受験する場合は対策が必要となる。

科目数は、難関大を中心に基本的には3教科型。近年では2教科(選択)型も増加している。

文系だと、英語、国語必須に地歴・公民・数学から1科目選択が主流。2教科型は英語・国語型、あるいは英語必須＋他教科1科目選択。または任意の2教科選択など。

理系は英語・数学・理科の3教科が基本で、2教科の場合は英語・数車型、数学必須＋英語・理科から選択などがある。

●複線入試の主流は「共通テスト利用」

私立大では、同じ大学の学部・学科に、A日程・B日程など複数の選抜方式があつて、試験日が重ならなければ併願できる。こういった方式を「複線入試」というが、複線入試には、一般的な3教科入試の他に、共通テスト利用入試や2～1教科入試、得意科目重視型など様々なタイプがある。

複線入試の主流といえるのは共通テスト利用入試だ。この選抜方式は、個別試験を行わず共通テストの得点だけで判定するケースが多いが、個別試験を課して共通テストの成績と総合して判定したり、共通テストと個別試験の両方を受験し、いずれか高得点の方で判定したりするケースもある。

私立大の共通テスト利用入試のメリットは、国公立大との併願がやすく、共通テストの受験だけで複数の私立大を受験できること。国公立大志願者にとっては共通テスト対策がそのまま私立大対策になるので人気も高く、同じ大学・学部でも共通テスト利用入試は一般入試より難易度は高くなる。だが、共通テスト利用入試の合格者は募集人員の10倍程度出るのが普通なので、戦略を立てて挑戦したい。

●「全学部日程」試験利用で併願を増やす

いわゆる一般入試は、学部・学科ごとに異なる問題を使って異なる日程で試験を行う。これに対して全学部日程入試では、全学部や複数の学部・学科が、共通の問題で、同じ日に一斉に試験を行うため、1回の受験で複数の学部に併願することが可能になる大学が多い。

さらに、学部ごとの試験とは別の日に行われるので、同じ学部・学科を2度受験することが可能になるほか、併願校との日程重複も回避しやすくなるメリットがある。

●併願割引なども使い賢い出願

私立大学の受験料は一般入試で3万5千円前後である。国公立大の他、私立大を4～5校併願すると受験料だけで20万円前後が必要になる。共通テスト利用入試の場合は1万7千円前後で、同じ大学の他学部も受験すると受験料が割引になる大学もあるので、併願校を考える場合はその辺も考えておこう。また、受験前に奨学金の申し込みができる大学もある。受験勉強以外の進路研究は、今のうちから進めておくとうい。

■センター試験利用入試の科目・配点例(2020年度入試)

センター試験のみ
立教大ー社会[センター4教科型] 外(200)・数・理から1(100)・国(200)・ 「地歴・公から1(100)[4教科4科目]
早稲田大ー政治経済 英(200)・数2(200)・国(200)・理1(100)・ 「地歴・公から1(100)[5教科6科目]
センター試験＋独自試験併用
中央大ー法・法律、政治[センター試験併用型] (センター)英(100)・国(200)・ 「地歴・公、数学、理から2(200)[4教科5～6科目] (独自)英(200)
早稲田大ー文化構想、文[センター試験プラス] (センター)「地歴・公、数学、理から1(50)[1教科1～2科目] (独自)国(75)・英(75)

■明治大・商学部の複線入試の例(2020年度入試)

全学部統一入試(2/5) 英(200)・国(150)・「地歴・公、数から※1(100) ※2科目受験した場合は高得点科目を採用
センター試験利用入試(前期日程・3科目方式) 国語(200)・外(200)・「地歴・公・数・理より※1(100) ※高得点科目を採用
センター試験利用入試(前期日程・4科目方式) 国語(200)・外(200)・「地歴・公・数・理より※2(200×2) ※高得点科目を採用
センター試験利用入試(前期日程6科目方式) 国語(200)・外(200)・数学ⅠA(100)・数学ⅡB(100)・ 理(100)・「地歴・公から※1(100)※高得点科目を採用
商学部個別入試(2/16) 英語(150)・国語(100)・「地歴、公民、数学から1(100) ☆英語4技能試験利用方式との併願が可能
センター試験利用入試(後期日程) 国(200)・数(200)・外(200)・ 「地歴、公民、理科から※1(200) ※高得点科目を採用